



佳作（愛媛信用金庫賞）

桜のお花見

藤原 大輝

版画

作品について

コロナ禍の中、車の中からゆっくりと土手沿いの桜を眺めました。桜色を出すのに、色を混ぜるのも楽しみながら力強く色を重ねていました。桜が自分を見ていると思ったのか？名を桜のお花見とつけた所がおもしろいと思いました。

講評

藤原大輝さんの「桜のお花見」は、最初にさくらと背景の桜色、2つの華やかな桜色が眼に飛び込んできます。通常のお花見は人が行うものですが、それを「自分が桜を見ている＝桜が自分を見ている」と、視点や思考を転換させた感性は素晴らしいと思います。その結果、作者自身が自然の中で発見した風景と自己の心象風景が共感し、今回の作品に昇華したのではないのでしょうか。また、画面中央の土手沿いの桜並木や両側の様々なイメージを想起させる大胆で自由な筆致の表現は、版画独自のマチエールや鮮やかな色調と相まって、画面をリズムカルで力強いものにしており、元気をもらえる作品です。

（原田 義明）